



**Data**

監督・製作・脚本・撮影: ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー

出演: フォルカー・シュペングラー / ビュル・オジェ / ハンナ・シグラ / ハリー・ペア / ヴィイートウス・ツェプリヒャール / ウド・キアー / マーギット・カーステンセン / ギュンター・カウフマン / エディ・コンスタンティヌ / ラウル・ヒメネス / イ・サ・ロー / ハーク・ボーム

## 👁️👁️ みどころ

同じ第二次世界大戦の敗戦国だが、占領国がアメリカ（だけ）だった日本と違い、ドイツには東からソ連が侵入！そのため1951年のサンフランシスコ講和条約と日米安保条約によって平和と安全を手に入れ、以降ひたすら高度経済成長の道を歩み始めた日本と違って、ドイツには“ベルリンの壁”に象徴される“東西分断の悲劇”が！“東西冷戦時代”を、戦後世代のドイツの若者たちは如何に生きたの？

中国では“世代論”が活発だが、日本では明治、大正、昭和、平成の“時代区分”が特徴。しかして、ドイツの「第三世代」とは？まずそこから勉強し、「ヌーヴェル・ヴァーグ」、「ネオ・レアリズモ」と並ぶ「ニュー・ジャーマン・シネマ」の勉強と、それを代表するR・W・ファスビンダー監督の勉強を！

さらに、“哲学の国ドイツ”はクソ難しい議論が特徴。本作でも冒頭から「意志と表象としての世界」が語られるが、テロリズムを目指すドイツの「第三世代」はそれをどう理解？難解だが、こりゃ必見！

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

## ■□西ドイツのR・W・ファスビンダー監督作品が初公開！■□

私は2006年7月に映画検定4級に合格し、2007年1月に同3級に合格したが、特にその受験勉強をしなくても「アメリカン・ニューシネマ」とは何か？くらいはよく知っていた。それは、1967年の『俺たちに明日はない』をタイム誌がニュー・シネマと評したことから始まったもので、それまでのメジャーがウェルメイドの娯楽作品ばかりを送り出していたのに対し、斬新な手法を用いてアメリカ社会の現実を描こうとした作品の

ことを指す。『イージー・ライダー』（69年）や『明日に向かって撃て！』（69年）がその代表だ。

また、戦後の混乱が収まり、世界中で“映画熱”が高まる中、日本では1956年の日活映画『太陽の季節』に続いて、『狂った果実』、『処刑の部屋』など反抗的な若者たちを描く映画が大ヒットし、“太陽族映画”が生まれた。それと同じように、①フランスでは50～60年代に“ヌーヴェル・ヴァーグ”が、②第二次世界大戦末期から終戦直後のイタリアでは“ネオ・レアリズモ”が、③イギリスでは、“フリー・シネマ”が生まれた。そして、④戦後長い間低迷していたドイツ映画界に60年代末から西ドイツに生まれたのが、“ニュー・ジャーマン・シネマ”で、“その代表の1人がR・W・ファスビンダー監督だ。これらは、『映画検定公式テキストブック』（キネマ旬報映画総合研究所編）（199～200頁）で解説されており、大いに勉強になるので関心のある人は是非勉強してもらいたい。

1945年生まれのR・W・ファスビンダー監督は1982年に37歳の若さで死去したが、40本以上の作品を発表し、演劇分野でも活躍したらしい。そんな彼の作品が日本の劇場で公開されることはなかったが、今般シネ・ヌーヴォが『第三世代』と『13回の新月のある年に』を日本で初公開するため、その試写会が開催された。こりゃ、必見！

しかして、大きな社会問題提起作たる『第三世代』は難解ながら見応え十分だったが、R・W・ファスビンダー監督の個人的問題（男女問題）をテーマにした『13回の新月のある年に』は、私にはノーサンキュー。『第三世代』というタイトル自体が曰くありげだが、さあ、本作の問題提起は？本作を観れば、なるほどニュー・ジャーマン・シネマにR・W・ファスビンダー監督あり！ということがよくわかるはずだ。

## ■ ■ “第三世代”とは？ その1「大分類」では？ ■ ■

昨年10月の第17回中国共産党大会で“5年2期”という任期制を廃止し、1949年の中華人民共和国建国から100周年にあたる2049年にも96歳で党主席と国家主席であり続けることを可能とした習近平（1953年生まれ）は、革命第五世代。革命第一世代が毛沢東、第二世代が鄧小平、第三世代が江沢民、第四世代が胡錦濤だ。また、中国を代表する映画監督であるチャン・イーモウ（張 芸謀）、チェン・カイコー（陳 凱歌）、ティエン・チュアンチュアン（田壮壮）たちは“第五世代監督”と言われている。チャン・ユアン（張元）や、ジャ・ジャンクー（賈 樟柯）、ワン・ビン（王兵）、ロウ・イエ（婁 燁）たちが第六世代監督だ。

2018年が明治維新150周年にあたる日本では、明治・大正・昭和・平成という年号が機能しているため、“〇〇世代”という分類はなく、昭和生まれ、平成生まれという分類や、戦前生まれ、戦後生まれという分類が定着している。日本もドイツと同じく第二次世界大戦の敗戦国だが、占領軍がソ連や中国ではなくアメリカ（だけ）だったことがラッキー。そのため、1951年のサンフランシスコ講和条約と日米安保条約の締結によって、

日本はアメリカの属国か？と言われながらも早期に経済復興を終え、1950年代後半からは高度経済成長の時代に入り、そのまま豊かさや安全性を享受しながら大きく成長していった。それに対して、ドイツは東側からソ連が“解放軍”として侵攻してきたため、ベルリンが東西に分離されたうえ、“ベルリンの壁”が“東西冷戦”の象徴になった。そのため、1989年にベルリンの壁が崩壊するまでドイツは西と東に分断された国家になったうえ、東西ドイツ統一後もドイツ国民はさまざまな試練を受けることになった。

しかして、本作のプレスシートによれば、近代ドイツは“大きなスパン”では、第一世代は1848年の革命以降の時代、第二世代はヴァイマル期からナチズムの時代、そして第三世代が戦後の現代ということになる、らしい。本作には女教師が学生にドイツの歴史を教えるシーンが登場し、1789年のフランス革命と比較して1848年の（ドイツ）革命の意義とその歴史的な位置を語らせているが、ドイツでは1848年の革命以降が近代になるわけだ。（ちなみに、日本では1686年の明治維新以降が近代になる。）

## ■□■ “第三世代” とは？ その2 「小分類」 では？ ■□■

他方、同じくプレスシートによれば、“短いスパン”では、第一～第三世代は1960年代以降の“政治の季節”における過激主義の世代分類としても捉えられるらしい。それによれば、「第一世代」は世界を変革する理想と権力に対する絶望の中で、夢と大義をもって行動した60年代の活動家たちを指し、「第二世代」は1967～68年の運動の過熱化と分断の中で一部の過激な者たちが地下活動としてテロ行為を行った時代、すなわち、ドイツ赤軍派のリーダーとなるアンドレアス・バーダーらを中心とした者たちの時代を指すらしい。そして、その後にくるのが本作の若者たちを中心とする「第三世代」だが、彼らはテロ行為を自己目的化し、大義もなくただ活動する者たち、らしい。しかもそれは、元来は敵対者だった資本家や権力の手法を真似するという状況まで生み出すことになったらしい。

1945年生まれのR・W・ファスビンダー監督は1967～68年の過激な時代の風を少なからず受ける中で映画監督の道に進んでいったから、過激派（ドイツ赤軍派）の活動とかなり密接な接点を持っていたらしい。そのため、彼にとっては、“短いスパン”という「第二世代」と「第三世代」が自分自身の社会活動の場としても、制作する映画のターゲットとしても最も興味ある対象だったわけだ。

## ■□■ 本作への出資は拒否！ やむなく自主製作で！ ■□■

日本では、1960年代後半に盛り上がった学生運動が1969年1月の東大安田講堂事件以降急速に衰える中、日本赤軍が生まれた。そして日本赤軍（奥平剛士、安田安之、岡本公三）は、1972年5月30日にテルアビブ空港乱射事件を起こした。他方、ドイツではドイツ赤軍（RAF）が1977年9月に、ドイツ経営者連盟会長であるハンス＝マルティン・シュライヤーを誘拐し、10月にはパレスチナ解放人民戦線（PFLP）とともに

ルフトハンザ機をハイジャックするというテロ事件を起こした。そして、これらについては、ハイジャック機には特殊部隊が突入し、RAF 幹部は獄中で相次いで自殺し、シュライヤーは遺体で発見されるという衝撃的な結末となった。ドイツでは、これら一連のテロ事件を「ドイツの秋事件」と呼んでいるが、それは、R・W・ファスビンダー監督を含む9名の監督による1978年のオムニバス映画『秋のドイツ』がこの事件を描いたためだ。

しかして、本作は『秋のドイツ』に続いて、「ドイツの秋事件」をテーマにした映画だから、社会問題提起作ではあるものの、当時のドイツではテロリズムを扱うことの忌避感が根強く、一旦は約束された出資も後にすべて断われたらしい。そのためR・W・ファスビンダー監督は自身の蓄財と借財によって本作を自主製作したと言うからすごい。しかし、それほどまでに本作の製作に駆り立てたR・W・ファスビンダー監督の意欲は一体何だったの？それを、本作を鑑賞する中でじっくり考えたい。

## ■□■連合赤軍を描いた若松孝二監督と共通点が！■□■

本作は起業家のP・J・ルーツ（エディ・コンスタンティヌ）が、自身の事業であるコンピューター販売の不振を憂う中で、この都市でテロ事件が起きれば警察が捜査用にコンピューターを導入するはずだという着想を持つところからストーリーが動いていく。テロ事件を計画している地下組織のメンバーはアウグスト・ブルム（フォルカー・シュペンングラー）、ヒルデ・クリーガー（ビュル・オジェ）、ペトラ・フィールハーバー（マーギット・カーステンセン）たちだが、ルーツの秘書であるズザンネ・ガスト（ハンナ・シグラ）も実は地下組織のメンバー、さらにその夫のエドガー・ガスト（ウド・キアー）もメンバーらしい。また、テログループのリーダーであるアウグストはルーツと通じているらしいから、テロリストたちの計画は、全て企業と権力的手中にあるらしい。しかして、アウグストたちのテロや誘拐計画はいかなる手順でいかなる展開を？

日本の連合赤軍の軌跡については、若松孝二監督が『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程（みち）』（07年）（『シネマ18』56頁）で取り上げている。また、若松監督が若い時からなぜ日本赤軍の過激派と接点を持ったのかについては、『止められるか、俺たちを』（18年）（『シネマ42』231頁）で描かれている。若松監督は1936年生まれだから1945年生まれのR・W・ファスビンダー監督とは少し世代がずれるが、映画監督でありながら過激派と密接な接点を持っていた点では、R・W・ファスビンダー監督は若松孝二監督と同じだし、過激派のテロ事件を映画の形で社会問題提起するというスタイルも同じだ。

## ■□■“意思と表象としての世界”とは？さすが哲学の国！■□■

ドイツ革命は1848年だから、1789年に起きたフランス革命には遅れた。しかし、ドイツはヘーゲルやマルクスを生んだ国だから、哲学には強い国。したがってその国の最先端をいく若者たち（？）が理論的かつ哲学的なのは当然。しかして、本作冒頭から何度

も語られる“意思と表象としての世界”って一体ナニ？

テロリスト集団リーダーのアウグスト以下の若者たちのIQがどの程度なのかは知らないが、その行動を見ていると必ずしも利口そうとは思えない。また、日本の連合赤軍がスパイの存在を巡って内部対立が激化し、内ゲバ闘争を起こしたのと同じように、彼らの内部でも互いに疑心暗鬼状態が広がり、内ゲバが始まっていく。これをみていると、その知能レベルはそれほどでもないと思わざるを得ない。しかし、トコトン議論する姿勢は徹底しているから、日本でよくあるような“暗黙の了解”はあり得ない。そのため、スクリーン上ではあらゆるシーンでクソ難しい哲学論争(?)が続くことになる。その議論を聞いていると、疲れてくることは間違いないが、その内容に注目！

## ■□■テロリズムの効力は？本作の若者たちのレベルは？■□■

“アメリカン・ニュー・シネマ”を代表する『俺たちに明日はない』(67年)、『イージー・ライダー』(69年)、『明日に向かって撃て!』(69年)では、自由を求めるアメリカの若者たちの“暴走ぶり”が突出していたが、“ニュー・ジャーマン・シネマ”を代表する本作では、自由を求めるドイツの「第三世代」の若者たちの暴走は“権力”に向けられテロリズムに走っているから、その違いに驚かされる。ちなみに、日本でも『菊とギロチン』(18年)では、大正時代のアナーキズムを目指す若者たちの知的レベルの低さが目立っていた(『シネマ42』158頁)し、『ゲティ家の身代金』(17年)では、大富豪の誘拐事件を執行した誘拐犯たちのバカさ加減が目立っていた(『シネマ42』172頁)。しかして、本作でもそれと同じように、終盤になるにしたがって、アウグストたちテロリズムを目指す「第三世代」の若者たちの知的レベルの低さが目立ってくることになる。

アウグストたちが本作冒頭に登場するコンピューター販売の企業家ルーツを誘拐するテロを計画し、実行したのは事実。それは本作に描かれるとおりで、そのテロリズムは結局のところ資本をよりよく保護するために資本が生み出したアイデアだったとは・・・？これは、あたかも1960年の安保闘争の時、委員長として全学連を率いた唐牛健太郎が活動資金を調達するためさまざまな“知識人”に“カンパ”を求めたことが批判されたが、それと通じるものがある。本作では、アウグストたち「第三世代」の若者たちのハチャメチャさが浮き彫りになるが、なぜR・W・ファスビンダー監督はそれを本作で描いたの？それをじっくり考えれば、本作はメチャ興味深い映画だが、とにかく哲学論争が多くて難解だから、鑑賞するにはそれなりの覚悟で・・・。

2018(平成30)年12月20日記